

竹内章郎『新自由主義の嘘』を読んで

下山房雄

本書（B6版変型 158頁 本体1300円）も梶田所長から「どうでしょう」と渡された。岩波書店刊「双書 哲学塾」15冊の一冊である。双書の著者15人のどの人も私は不知。哲学は観念論と唯物論の「二つの陣営」（エンゲルス）に分かれるとする教条を正しいと考えている私の教養からすると、15人の皆が観念論者なのか。竹内章郎（あきろう）氏も「私たちが働いてお金を稼ぐ能力（労働能力）も、ふつうは私たち個人の私的所有物です。なぜなら、まず、労働能力の源である自分の身体を自分のものとみなすことは、世間一般の「常識」のようだから」（27頁）と述べて、支配的なもの見方が即真理だとする主観的観念論のようである。しかし、竹内氏が大月書店

や青木書店刊の著書を持つている（私は不勉強で未読）ことからすると、左翼の論客で唯物論者かもしれない。本書ではつきりしない。本書ではつきりしているのは、独占体Ⅱ帝国主义の概念無しで、さらには資本Ⅱ賃労働の搾取関係の概念無しで、新自由主義批判が行われているということだ。そういう装置でも、かなりの新自由主義批判が行われ得るということを、私は現代の桎梏突破のための広範な統一戦線の重要性あるいは可能性が示されていると積極的に受け止めたい。

本書の批判の核点は、新自由主義が重視する自己責任なるものをへ自己個人の能力に基づく商品販売が等価交換形式をとる市場での貨幣への交換として行われるところに各個人の生活基盤を求めることと展開して、その論理を共同性の強調確認で批判するところにある。第一に、市場での交換は社会的分業の上に成立しているから、市場自体がそもそも他人依存の体制だ。第二に市場に登場する各個人の能力は、自己の修業労働だけでなく、他人の教育労働に拠っており、さらにパソコン操作能力発揮はパソコン機器とかネット環境とかに依存しているように個人の能力発揮は市場外部条件Ⅱ社会文化環境に依存している。本のカバー・コピーでは、後者が「能力の共同性」という革命的ビジョンと謳われている。

新自由主義の経済思想Ⅱ市場原理主義を商品社会レベルで批判するこのような装置はそれなりに首肯できる。しかしこの批判装置は、古典的自由主義批判にもあてはま

り、違いは市場と自由を一体化する新自由主義は、市場を超えた別の場に自由を求める自由主義「以上に不平等」だと（106頁）せいぜい程度問題になる。独立小生産者の中から叢生する資本が、封建権力に依拠した特権商人に対抗して「営業の自由」を掲げブルジョア革命を遂行する理念に措定した自由主義と、独占体が、国内では労働者階級と中小業者が獲得した労働生活営業擁護の規制を、国外では発展途上国が産業擁護のために設定した規制を、緩和撤廃する理念としての新自由主義とでは、歴史方向性が全く逆なのだ。本書の装置では、そのことの把握は不可能だ。市場で同一ルールが適用されるだけでは「もともとの私的所有物の多寡という格差が放置される」（45頁）という市場の公平性の内実批判よりも、一物一価の法則が大企業と小零細企業との水平的競争において後者の破産的退場―私的所有物喪失という因果をもたらしことを言うべきだろう。

労働と貨幣の交換の場⇨労働市場の論理の把握は、それが形式的平等の上に搾取という実質的不平等が貫徹している点で曖昧な把握となっている。22、35、37、78、85、88頁などの叙述は、貨幣と労働はときには不平等交換、しつかりした労働組合アリの場合などでは等価交換と説かれているようである。もちろん労働者擁護の労働市場規制の一つの形⇨協約体制の主体である労働組合の機能発揮は重要である。だからこそ、先進国での新自由主義は1980年代におけるサッチャーのイギリス炭労攻撃、

---

レーガンの航空管制官労組攻撃、中曽根の国労攻撃の勝利によって幕が開けられた。しかし本書はこれらに触れない。それは資本―賃労働関係を労働市場の不平等性の多寡のレベルでしか把握してないからだ。私は考えた。

(2009年3月31日)

(NPOかながわ総研「研究と資料」2009年4月号、154号)